

繰り返していたという。

- 4) 札幌市の企画展に引き続き、旭川市でも同様の企画展が開催された(2005年7月2日～8月21日)。

文 献

工藤雅樹編、金田一京助著 2004.『古代蝦夷とアイヌ——金田一京助の世界2』平凡社。

北海道環境生活部編 2001.『アイヌ語地名ハンドブック』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

田村すず子 1997. アイヌ語。亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典セクション——日本列島の言語』1-88. 三省堂。

(青木茂治)

平岡昭利編著：離島研究 II. 海青社，2005年，222p., 2,800円。

本書は2003年に刊行された『離島研究』(本書の刊行により『離島研究I』として増刷)の続編である。所収論文の多くは既発表論文をもとにして、再編されたものであり、その意味で前書『離島研究I』に比べてインパクトは少ないものの、堅実にまとめられ、読み応えのある内容となっている。と書いたものの、すぐに前言撤回である。地理学者ではない多くの読者を対象としている本書にとって「インパクトが小さい」という評者の感想は、ほとんど意味のないことである。確かにこの学会に身を置く評者は「既発表論文」を従前から知っているの、インパクトは少ないのであるが、本書はそもそも地理学者だけを相手に書かれたものではない。その意味で多くの読者は本書所収の論文に初めて触れるのであり、その時に受けるインパクトと内容の充実度は十分であろう。

さて、構成は前書と同様に、第1章に全国の離島を対象とした研究が配され、第2章以下に個々の島々の事例研究が配されるというスタイルは変わらない。しかし、前書では「島の特性と結びつき」、「農業・牧畜の島々」、「漁業・養殖の島々」という構成で、結びつきと産業が大きな主題であったのに対し、本書では「島嶼の特性と移動と結びつき」、「島嶼の産業構造とその展開」に加えて、「島嶼の集落と生活行動」が第3部として組み込まれている。前書に加えて、集落や生活といったテーマが加わっ

た。また、今回取り上げられた島の多くが沖縄県・鹿児島県を中心とした南西諸島にあり、長崎県の2島以外には瀬戸内海の粟島と、日本海の飛島のみである。前書では瀬戸内海の島が3島に隠岐などが取り上げられていたことから、本書では南西諸島の重心が大きくなっている。島嶼の分布という点からみると、仕方がないのかも知れないが、もう少し瀬戸内海の島々や東日本の島々のボリュームのある方が、バランスがとれているように見える。

以下、簡単に章構成を紹介すると「島嶼の特性と移動と結びつき」と題された第1部では、まず宮内久光が全国の255の島を対象に最寄りの中心都市での滞在可能時間の分析を行っている。続く第2章は須山 聡・鄭 美愛が奄美大島住民の居住地移動を、第3章は宮内久光・下里 潤が沖縄県浜比嘉島の架橋効果を論じている。また、第4章では浮田典良が八重山諸島の遠距離通耕を取り上げている。次に、産業構造とその展開を扱う第2部では、第5章で平岡昭利が大東諸島の開拓を、第6章で河原典史が香川県粟島海運業から養殖業へという基盤産業の変容を、第7章では山内昌和が壱岐長島の漁業の持続性を、第8章では宮澤 仁が五島列島福江島の小売業と消費者行動を検討している。第3部は前書では「部」としては掲げられなかった集落や生活行動が主題となっており、第9章では大城直樹が八重山諸島小浜島の集落立地と生活様式を、第10章では福田珠己が竹富島の町並保存運動を、第11章では賀納章雄が伊良部島のアワ栽培と地域社会を、第12章では山形県飛島の人口減少と住民生活の変更を描いている。

評者は前書を書評して「健全な島嶼地域へのまなざし」ということを書いた。その昔、多くの島嶼、特に南西諸島を扱った書籍が「違ったもの」、「ものめずらしさ」を湛えたまなざしを離島に向けていたのではないのかという懸念があった。そうしたかつての離島を見るまなざしに感じた「異形を見るまなざし」はもはやない。むしろ、島嶼であるがゆえに顕在化している問題を、島嶼でないところへも還元できる問題としてとらえている。こうした視線で離島を取り上げていることを指摘したかったのである。

もう少しこの点について、行を割きたい。かつて評者は『第三世界を描く地誌(熊谷圭知・西川大二郎編、古今書院)』を書評する中で、地誌を描く時の視線について言及した。他者を描く地誌なのか、

自らを描く地誌なのか、ということについてである。古来地誌書の編纂は多くが「支配」と密接に関わってきた。地誌は領土を効率的に支配・経営するための、あるいは領土獲得・植民地獲得のための地理情報の収集とその集成であった。地誌編纂事業には当然その時代の強い要望と利害が存在したわけであるが、これまで第三世界を描いた地誌の多くは非第三世界が他者を描く視点で編まれたものではなかったか。このような議論を踏まえて、本書を一つの離島地誌の試みではないかと評者は受け止めている。その際、それが自らの利益のために他者を描く地誌なのか、自らの利益のために自らを描く地誌なのかでは同じではないと考える。

別の言い方をするならば、次のようにもいえる。評者はつねにこの本を、研究者がそのフィールドとどのような関係を保つのかという点に注意しながら読んでいる。調査の材料としてきわめて客観的にさめた視線だけでフィールドを見るのか、逆に、なるべく住民と一緒にになり、時に住民とともに地域おこしなどの運動にかかわりながら、フィールドに身を置くのか、想像するに評者も含めて多くはその二つのフィールド観の間を漂っているのではないか。前者のようにドライになりきるには自信がないし、後者の立場では結局自分は住民にはなりきれないということに気がついてしまう。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。」とはこのことか、むしろ一緒に住民運動をするほど直裁的ではないにしても、研究者としての立場で何か貢献できることがあるのではと考える。その際、他者を見るまなざしでフィールドを見るならば、フィールドへの還元はそれほど重要ではないはずである。しかし、フィールドを自らの内なる世界とみることで、離島を通じて自らの社会を照射することができるならば、研究者として少ないながらも貢献の道が開けるのではないかと考える。「離島」とはこの小さな島国「日本」のことではないのかという立場からの読書もまた可能である。

いずれにしても、フィールドを見る視線や視座にはつねに敏感でいたい。それらの細かなズレをいちいち確認するには十分の注意がいる。そうした一例を、第4章（浮田）の追記に見つけた。「遠距離通耕」という表現について注記されたものであるが、「八重山諸島でこの遠距離通耕のことをなんと呼んでいるかを、幾人かの人々にたずねたのであるが、

特別の表現は存在しないようであり、ただ『田を作りに行く』というように表現する。思うに、遠距離通耕の行われている村では、田は地元ではなく、遠隔地にあってだけであるから、ことさら特別の表現は発生しなかったであろう。」というものである。われわれの目には特殊と映っても、そこに暮らす人々にすればそれは特殊でも何でもない至極当然のことという「視座のズレ」である。実際問題としてなかなか難しいのであるが、意識的にこの「視座のズレ」に気がついていなければならない。たとえそれが小さなズレであってもそれに敏感でいたいのである。

最後に編者について一言触れておきたい。編者の平岡は、先に手がけたプロジェクトである『地図で読む百年』のシリーズを世に問うた後、間を置かずして『離島研究』を刊行し、2年後には続編の本書をまとめられた。近年企画されているいくつもの地理学のシリーズ本が遅々として進まない中で、編者の卓抜した企画・編集の能力と手腕に敬服する。編者の次の企画に期待しているのは評者だけではない。

（荒木一視）

宮澤 仁編：地域と福祉の分析法——地図・GISの応用と実例——。古今書院。2005年、162p., 3,500円。

本稿執筆中に、2005年度の日本の総人口が、初めて、自然減に転ずる見通しであることが発表され、マスコミの大きな話題となっている。人口減少をもたらす少子化、およびそれと対を成す高齢化に関しては、すでにあまたの議論があり、これを論じた著作も枚挙に暇がない。しかし、それらの多くは、マクロな人口動向をもとに、年金制度や介護保険などの福祉制度を論じたものであり、そこでは、年金の受給—負担バランスや保険財政など、いわば「人の数」に還元できる問題が取り扱われる。もとより、そうした問題設定の重要性は否定できないが、少子高齢化はそのようなマクロな量的問題としてのみとらえられるものではあるまい。子育てにしても高齢者介護にしても、もともとはミクロな個々の家族の営みに帰せられる事柄であり、たとえ、国家レベルでの政策や体制が強い影響力を持つとしても、それは地域という中間的な社会単位が介在することによ